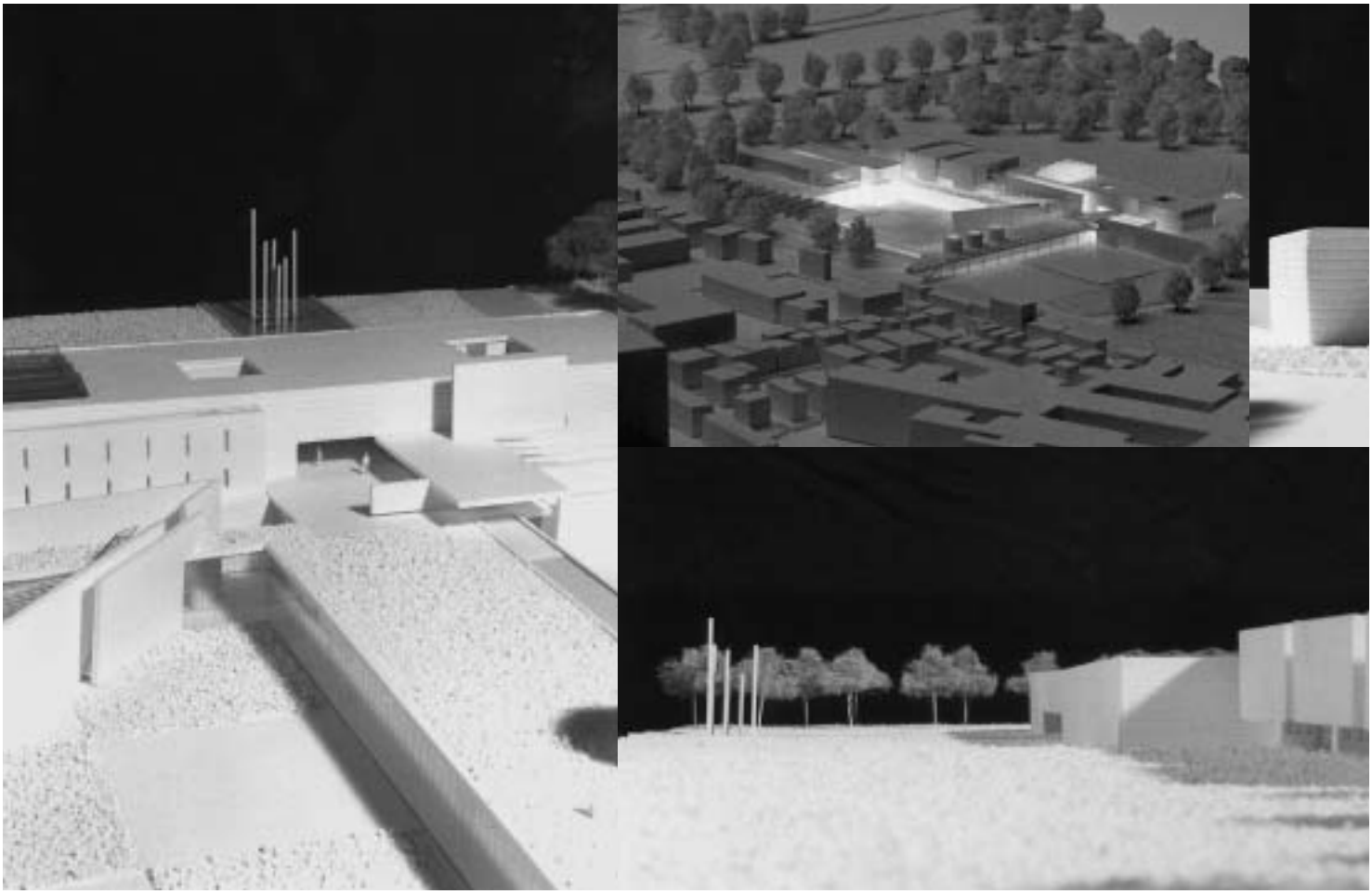
糸島　光洋

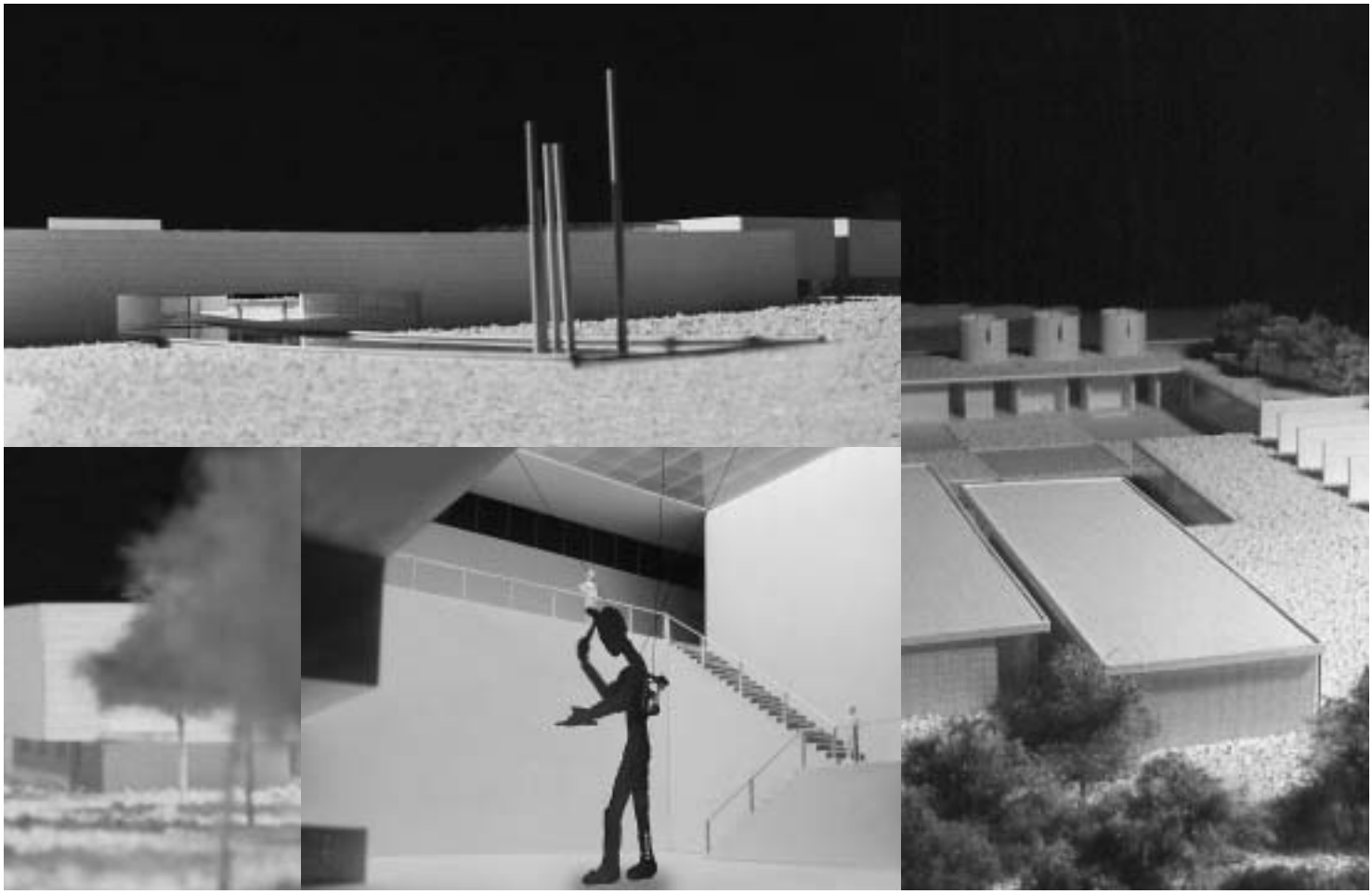


修士設計

東京都新美術館の計画と設計

― 現代美術と空間―

糸島　光洋



糸島　光洋

美術館と呼ばれる施設は、芸術活動における作品に対する選択と移動、集積、提示といった一連の制度で成り立っているといえる。したがって時間や距離を越えて、美術館に集められたものは「今そこにあるもの」でありながら、本来のそのもののあり方、コンテクストからは自由であり得ない。とくに現代美術においては、作品が時間的、空間的な性格を持ち、特定の場所とのつながりを深めていく傾向にある。しかし、かといって全ての作品を制作された場、設置されていた場に戻し、本来のコンテクストを取り戻すということも、美術館という制度自体の自己矛盾に陥ってしまう。なぜなら私たちは隠れた芸術、知ることのなかった芸術をこの「移動」と「提示」によって体験することができるのだし、まさにその理由によって美術館という制度がつくられたと考えられるからである。

この矛盾に対する自覚から、現代美術と美術館の関係を再考していくことが望まれる。

指導＝若色　峰郎

美術館建築の課題は展示される作品と空間をどう対応させるかという問題であろう。つまり、作品のボリュームと空間の規模（広さ、高さ）、展示空間の採光計画、展示形式と照明計画のあり方などについて計画指標をどう決めるべきかが大きなテーマとなる。

一方、近年の現代美術の様相は、芸術家の様々な新しい試みにより、作品の表現方法や作品の素材にいたる様々な面で多様な展開をみせていると言ってよいだろう。特にインスタレーションなどの場合は、様々な美術のジャンルが融合し合って表現されるため、展示形式や空間の設定が作品のボリュームを決めるとも言われている。

従って、これまでの美術館建築にみられる展示空間の設定では、対応できない問題も生じはじめている。

この計画案は東京都の新美術館構想に基づく提案で、現代美術を主要な展示対象とした美術館の計画である。この提案で特記できることは、①既存の都立美術館（４館）の現状把握と新美術館の性格づけ（独自性）、②選定した計画地（昭和記念公園／立川市）と周辺環境の読みとり、③展示空間における鑑賞行為の類型化と空間の設定、④可動壁による展示空間の可変性、⑤光の空間化（内と外）などについて、建築計画的な考察を行った上で、形（設計）に転換するという明解な手法をとっていることである。全体として手堅くまとめられた提案として高く評価したい。